



松染清史秋七冊

卷二



~13
3917
2

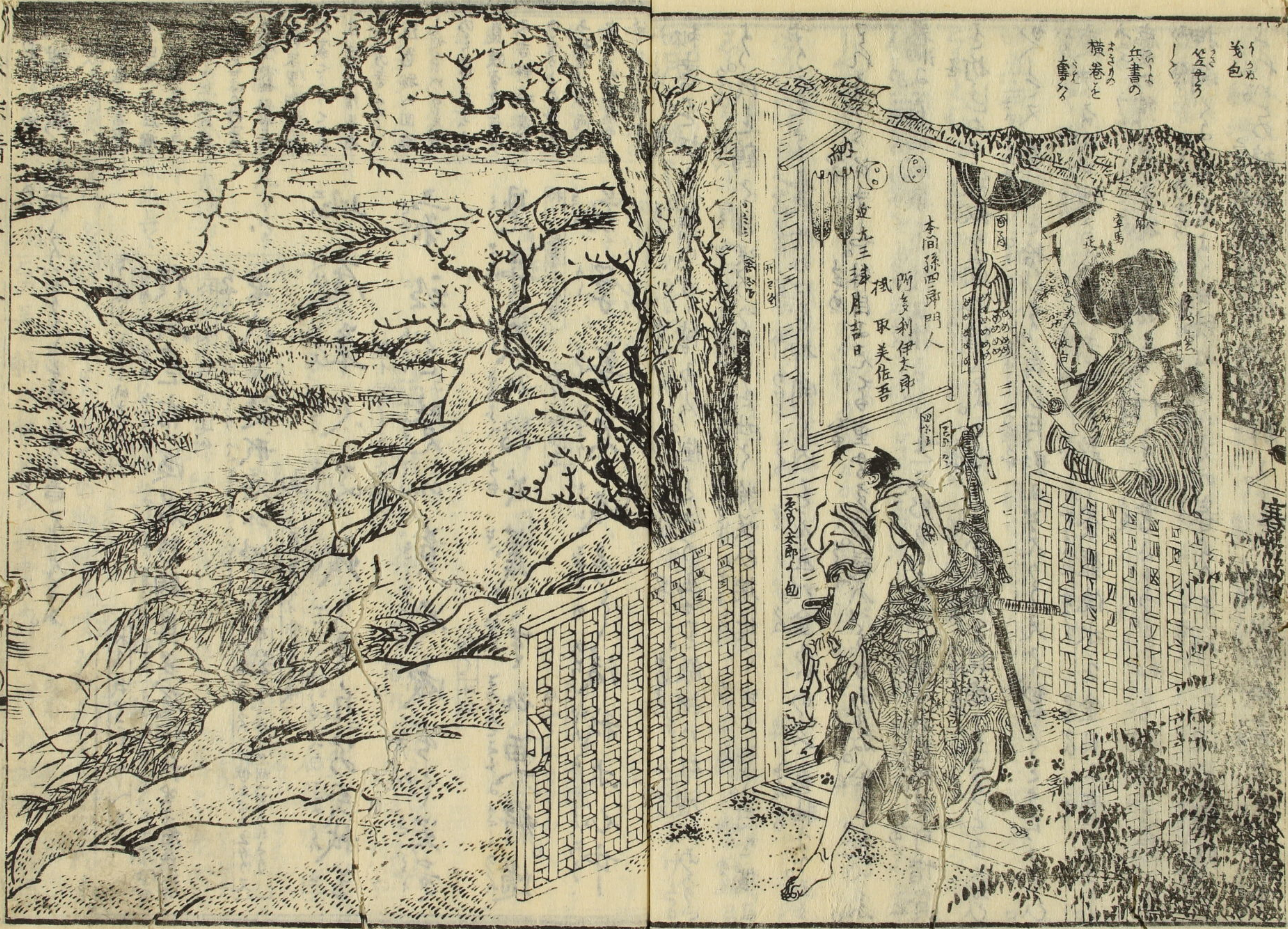


公集書史卷之二

公孫青和入元之二

打扮つ。朝まゐれは旅宿をもち出件しんけんの寺にま到る。大門の母を
徘徊はいかいし。今くくする程ほどにや未下刻みげよりうみま一ど正勝せいしょうも正元せいげんも
猪いの本もとより。正せい儀ぎの南朝なんてうのおん歌うたとなりむひいへ。後ご閑かんを
憚おそりく。糸いと緒おもぬや。とありふ。ゆき奉ほう意いなり。あくする行ゆきも冬ふゆの
日の短みづかく。ぬきく撞つはあなど。山寺さんじの撞うの音おとも。これあをうれよ
似にたり。いざ退たいさん子こあくらん。お子の母ははは待まちり。子こも。只ただ一人ひとりなり
僑居ききも。おり臥座ふざの夕ゆふ鳥とり。あめあをほくと。天てんうち仰あがり立た在ざいぬ
こそゆあぶさあなば。右みぎ忠ただつ太郎たろうの編あみ笠かさふく。小深こふかへくまぬ
ふ奉ほうえぬ山の麓ふもとをまきま。頃ころも冬ふゆの初はつめ。あられからる雨あめのふ
ふ翠すい微みより雲くもを吐はく。風かぜは俄は頃ころは吹ふ変へり。暮くれねどいと闇くらく
ありて。さく降ふる。驟すう雨うは懸かむ木きの下したも諸しよ般ぱんく。笠かさやうきんくも
ゆねば。雨あめの袖そでを巻ま揚あつ。袴はかまの袴はかま高たかく。直なまよる。程ほどは風雨ふうう
あつ。烈はげしく。笠かさは戴かぶる。ま。臺たい輪りんのを残のこり。往むか方もあつど
吹ふ断た離りら。水田みづゐを流ながる。鼠ねずみの。尾おを引ひ頭かぶを抱かかへ。苛いらしく山やまとさ
る。禿は倉くらの内うちへまう。一息ひといき吻くちとつれ。雨あめ水みづあう。髪かみの毛けを掻か
揚あげ。頂うへは被おる。搦な井いの巻ま袖そでを濡ぬさく。やを襟えりをうれ。たて
ま。鰯いわし口の緒おは著つる。布ぬのも襦じゆ袢ぱんを押お拭ふひ。あづは巻ま袖そでの袂たもとと
さ。外そとへ。ふ。綿わたの裏うらは湿ぬり。れど内うちは徹とほら。と。あ。り。た。は
安堵あんたく。そのち。備ひる。繪え馬ばの釘くわは掛かれ。裾すそも袂たもとも結むすく。揚あげ。水みづの音おと
る。程ほどに。度たく。攸きり。捨する。寒さむさ。年としの終はり。も堪たぐ。と。人ひとは
る。深山ふかやま辺への古祠ふるひらへ。神燈しんとうを。さ。る。日ひのいづ。と。暮くれ果はて。
雨あめの脚あしも。細こさ。う。ぬ。雉けう。と。ん。の禿は倉くらの。漆し松しょうが。寝ね坐ざして。已こ前ぜん

美色
笠さう
兵書の
横巻を
書々



同様の御を裁う。かぐその奥書をみる。

増補越後名寄

卷四菅名庄龍

谷山慈光寺

條下正成の述

言をのせり付ま

榮堂ハ捕頭官正

成の末男幼年の

出家よりその

後書し置巻布

をのせり付ま

置巻物ハ御福

し今ハ大體

のそなをふま

貞蹟よりとり

又吉野拾遺ハ

のそなをふま

ふふハ但而三

字ハの楷誤り

并々ハ誤り

附入ハ河内の

親心寺吉野の如意

輪堂ハ正成の

遺書ハあや同文

の尺牘也ハ殿残

ミハ正成ハ

奇多流布乃

墨本ハ大ハ違

ハ違ハ左の

さる左の

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

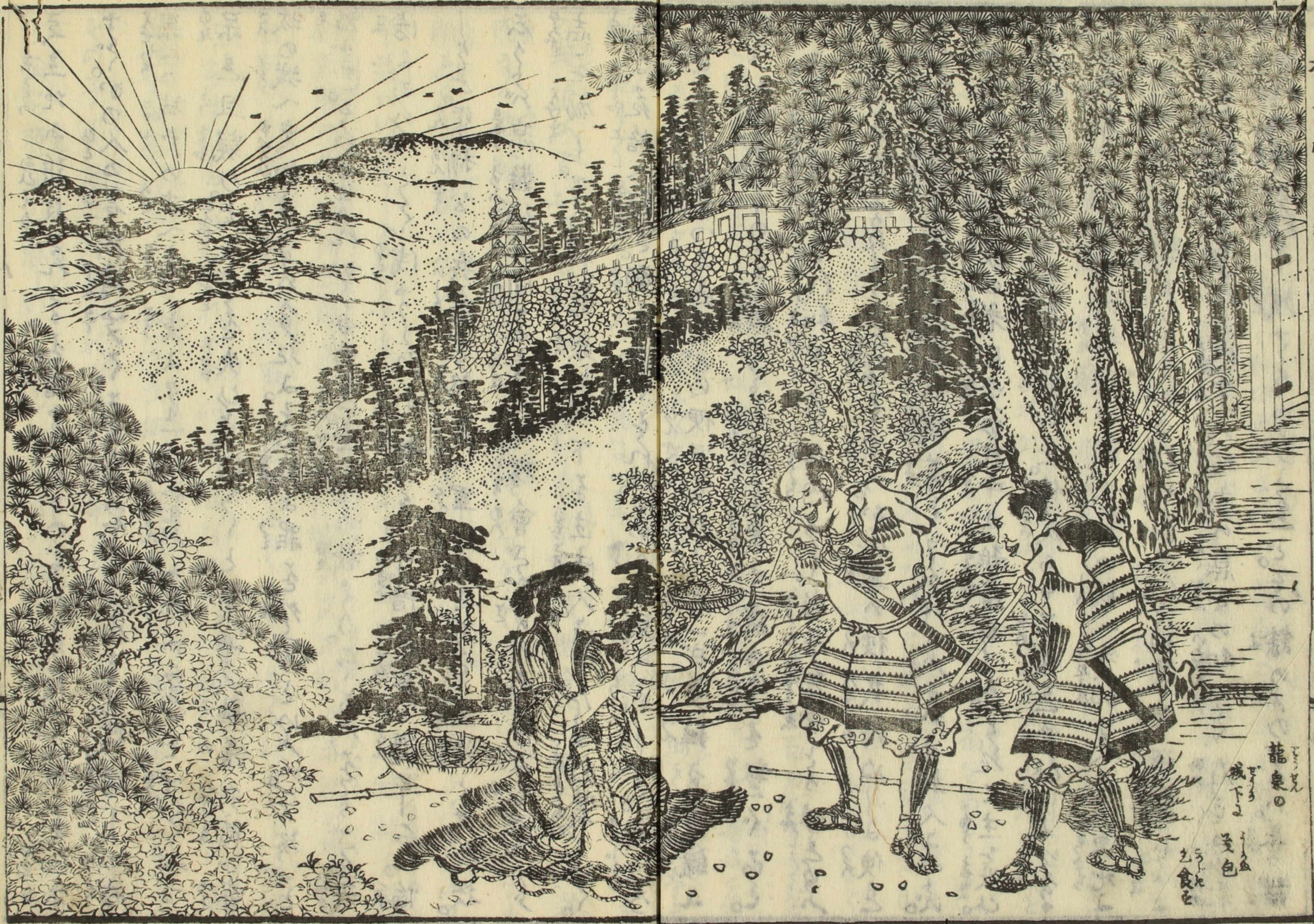
此度集人見

此度集人見

此度集人見

此度集人見

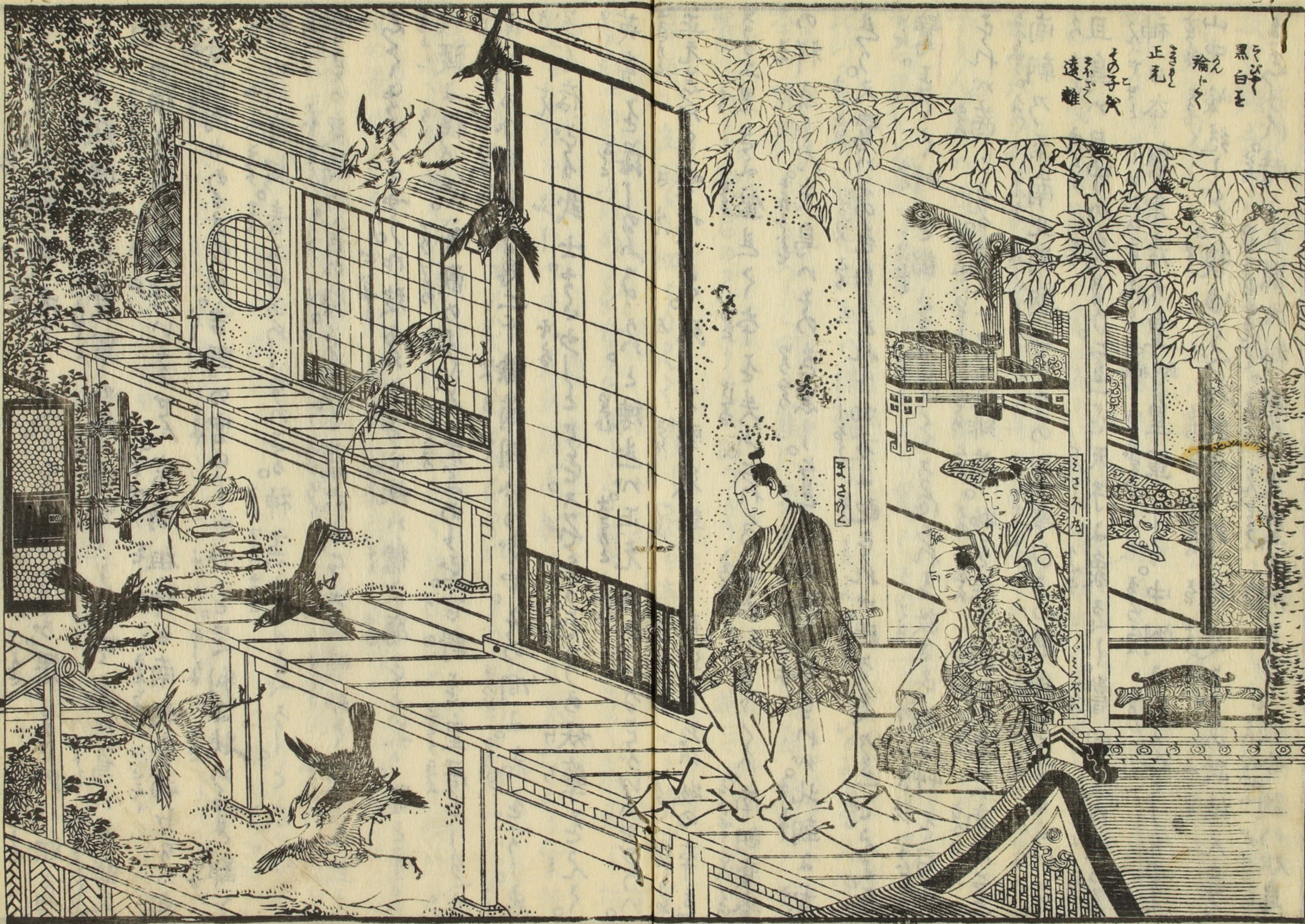
兵侍言直が家系よくぞありける。かく疑の解づれよめふれば。さき
わうさよ尋ねるる。嚮は本えぬ山の麓あり。ありける赤倉のうらへ
まうへり。ふと一笠やうり。ふと一笠やうり。彼巻袖を儒ふとく。繪馬の
釘は掛ける外は。牙をいみせり。あつて。元來雜居兵侍も。さき
より先は。彼赤倉の雨を避緯の為。俵を張ひふりて。圍さうさう
麓換し。秋件の兵侍。亡君宸期。その刃の恨を悔歎さう。密に
招き。あつて。さき。さき。故は。改の殿。待て。びく。自殺。し。ひ。さき
この遺命を稟く。家傳の兵書を。千劍破る。郎君。正。進。せん
亡君のふん志を果さる。故主の不義は。川弾く。その振さる。悉せ
ざり。言直が。却り。の後。うり。挙動。うり。奸佞邪智。あひ。さう
腹は。彼兵書を。復さ。へ。生く。百年の壽を保とも。千劍破との
同胞。正。見。系。の。う。さ。う。死。く。泉下の。君。さ。う。言。の。さ
う。さ。安。う。ぬ。う。ね。と。い。れ。さ。れ。つ。衝。と。身。を。起。く。竿。に。結。び。
忙しく。雜居が。巻袖を。懷。は。押。入。是。刀。を。引。提。く。ま。り。あ。う。い。如。法。團
夜の。さ。る。れ。ば。咫。尺。の。間。ゆ。え。さ。う。ど。牙。を。翻。く。内。は。入。り。簪。眼。し。
挿。う。り。さ。れ。准。儀。の。松。明。を。い。か。う。と。地。枕。の。埋。火。を。さ。う。さん。と。さ。う。ふ。え
の。さ。い。と。さ。れ。く。頻。や。ゆ。け。る。と。あ。う。り。ど。が。や。と。焦。燥。と。臆。細。く。吹。入。る。
門。の。戸。礮。と。引。う。り。と。さ。バ。サ。サ。や。燃。る。藁。火。を。高。く。抗。く。門。を。鎖。し。
本。え。ぬ。山。と。ゆ。く。は。天。を。明。く。日。由。り。山。の。巔。は。昇。る。ね。か。く
右。衛。門。太。郎。ハ。笠。や。う。り。サ。赤。倉。は。入。り。残。る。隈。う。り。索。ま。う。り。堀。井。の
巻。袖。の。さ。う。あ。う。さ。う。あ。う。さ。う。な。い。き。雜。居。兵。侍。が。示。る。く。さ。い。ひ。定。め。て。



龍泉の
城下の
景色
を
食む

投く翔去りて正元天皇を目送る。大に怪しむ。云の中いふ安ら
む。維るあぐ。と叫ぶるまば。右弔天皇より。今茲僅
四才より。正元の嫡男。操丸を御抱ひて。ほろり近くありぬ。
右弔天皇。楠普代の老黨より。姓の津積氏。字窪六と。呼ばれて。
そのへら操丸の乳母夫より。年の齡ハ四十の久を。六ツ七ツ。あやさん
ずん。妻ハ近曾より。子より。と。ふくを。と。思ひ
せむ。君と。入る。自と。あり。鳥。その。あやさん。の。後。有。と。
比。當。正。元。の。津。積。有。を。え。く。く。の。又。窪。六。は。も。
今の怪異。を。え。つ。同。又。窪。六。を。く。の。鳥。の。鳴。り。い。
置。した。を。郎。君。の。え。せ。く。く。む。く。く。ひ。く。抱。き。進。む。に。彼。の。
縁。頼。ま。ま。初。より。え。く。ひ。し。さ。奇。な。く。と。思。ふ。と。思。ふ。と。思。ふ。
正元天皇。く。嗟。嘆。く。死。する。勢。久。熟。う。目。逆。白。の。物。の。本。色。
く。く。黒。く。壓。く。本。を。失。く。それ。の。吉。凶。を。く。く。南。朝。衰。廢。
の。祥。ふ。ん。夫。鳥。ハ。その。色。黒。く。と。是。を。四。方。に。配。さ。れ。ば。北。朝。は。當。
く。又。鷲。ハ。その。色。白。く。それ。を。四。方。に。配。さ。れ。ば。西。く。く。と。く。と。く。
鷲。く。く。州。を。御。さ。る。死。く。く。を。放。さ。む。西。く。州。を。御。さ。
と。れ。ハ。萬。と。く。萬。ハ。一。名。深。緋。草。物。を。染。く。深。紅。之。赤。ハ。南。方。に。
南。朝。乃。至。南。北。兩。朝。多。年。の。争。ひ。その。勝。敗。を。示。さ。し。似。う。
且。鳥。ハ。日。中。の。鳥。より。皇。を。天。子。に。象。え。し。嘗。聞。人。の。代。の。首。
神。日。本。磐。余。彥。天。皇。神。皇。軍。く。中。洲。に。赴。く。と。い。ふ。
山。中。嶮。絶。く。復。ゆ。く。路。より。乃。棲。連。く。その。跋。渉。人。と。う。
く。く。時。ハ。天。照。大。神。夢。ハ。天。皇。に。列。り。く。朕。今。頭。ハ。咫。鳥。

黒白を
論ぐ
正元
その子
遠難



津審又耳緒バ。窪六々々々々果て次の日。あつた旅の用意と
いふ。河内國瀨良郡野崎の釈音堂を守る生法師ハ。疎々相
識あるものなれば。さきに賜ふ。方人ト。津既よそのひぬ。さるに
八月も尽く。九月の上旬。有一日正元ハ。津積窪六を呼び
いふ。それ頃日ハ又の喪よりなり。推さる。いふ。徒然
堪ざる。汝操丸又俱々。托山さへ。小松山の草狩る。いと
奥のへ。仰る。窪六うけり。童扈後三四人と。り
操丸又冊々。本んぬ山のさる。小松岡又赴き。終日草狩
し。初き主を慰む。操丸い。い。樹間立。階々。右
左。と。漫然。あ。推ハ却々。速く。動も。窪六ハ
も。遙々。後。忽地。又見失ひぬ。さ。窪六ハ。も
あ。と。慌忙。童扈後り。と。樹の蔭。叢の中。喚。叫。び
つ。尋ね。索る。新。由。り。日。向。暮。と。さ。も。あ。と
あ。と。を。残。せん。ひ。ひ。童扈後。の。さ。る。は。非
城中へ。き。なり。津の。を。所。り。正元。大。又。警。患
操丸。失。う。生。死。由。さ。己。ん。都。と。索。へ。と
い。た。る。あ。と。下。知。る。あ。の。熟。る。老。黨。の。夥。兵。を。て
前後の。城。戸。り。き。出。通。宵。さ。り。索。る。は。往。方。と。さ
る。

○第四 芒花より 袖振草

あ。り。交。野。の。原。を。け。け。袖。り。草。又。雉。子。啼。な。り。
い。と。果。敢。る。う。だ。う。ひ。の。世。と。い。は。れ。思。愛。の。羈。は

せえ。物敷布施。郎君の久後を親世音と祈致し。標丸を
背負ひつ。身を窶し坐をふく。藁りて累心両刀をうく
往方ぞ定めり。旅路は迷ひ出たり。その下は殆ど。かく春
より春ぬり。又十二年の光陰を經る。いづの安七
年。十月。菊地武政。義満將軍に攻る。且和睦を
その英気を遊る。母如くの城を守りて。ぬくひ九洲を封後んと
し。武政が武威あると見え衰く。終は志を果さず。明德
二年。南朝。ふみ龍泉の城主。和田正武。才より。享年五十四
才より。やうし。移ふ河内の國人。悉く叛き。足利家へ属せり。今
今。千劍破の城の残る。正勝。正元。ろろ。勇。とり。とも。
赤松紫竹山の大軍。火攻り。兄弟。後兵。あ。す。自
方の兵士。悉く討ち。捕兄。中。不。必。残。死。を。勝。正勝。ハ
犯路を投て。没落。十津川。漂泊。彼。あ。才。う。ぬ。叔
正元。一騎。二の城戸。立塞り。詰。誓。詰。心。款。を。射。
諾。その。才。由。薄。瘡。数箇。如。員。より。是。今。は。を。と。ひ。う。ぞ。
猛火の下を。つ。智。枝。煙。は。噓。く。立。深。入。夫人。文野。前。と。和。田
正武の息女。秋野姫を。救ひ。出。後。門。より。去。り。去。り。秋野姫の
乳母。豊浦の。只。知。り。る。ん。後。ひ。る。あ。う。れ。秋野姫は。去年。正
武世を。逝。孤。と。り。よ。け。正元。ふ。く。憐。乳母。り。う。の。千
劍破の城へ。近。夫婦。を。を。慈。ひ。る。実の女児。は。異。う。う。ど。の。姫
今。茲。は。十。四。才。容。止。の。婢。娟。る。い。じ。さ。う。り。標丸。イ
異。う。る。ゆ。う。い。婚姻の期。中。往。ち。あ。れ。べ。さ。子。の。ゆ。う。う。り。

妻子と

扶引て

正元

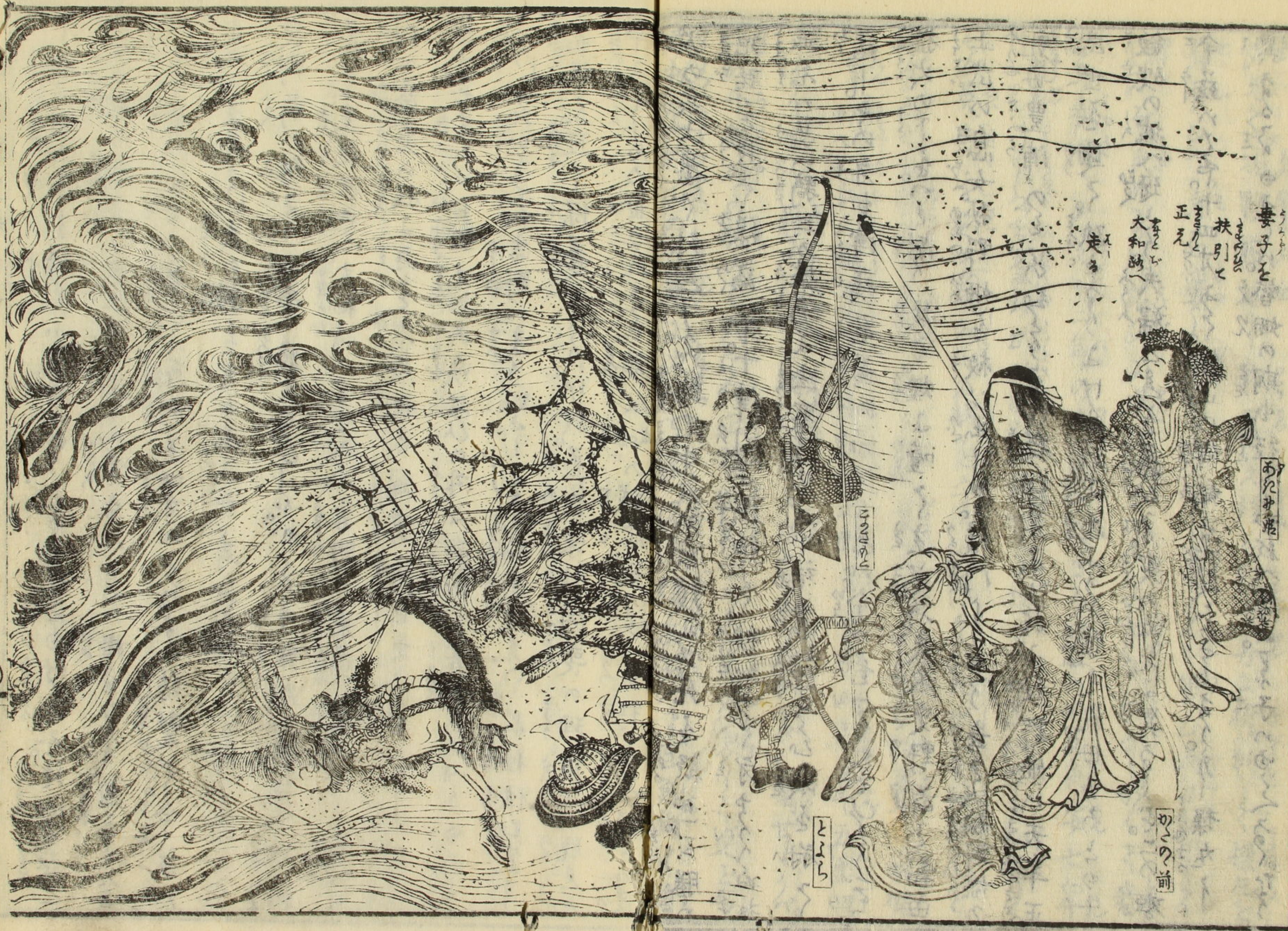
大和路へ

走り

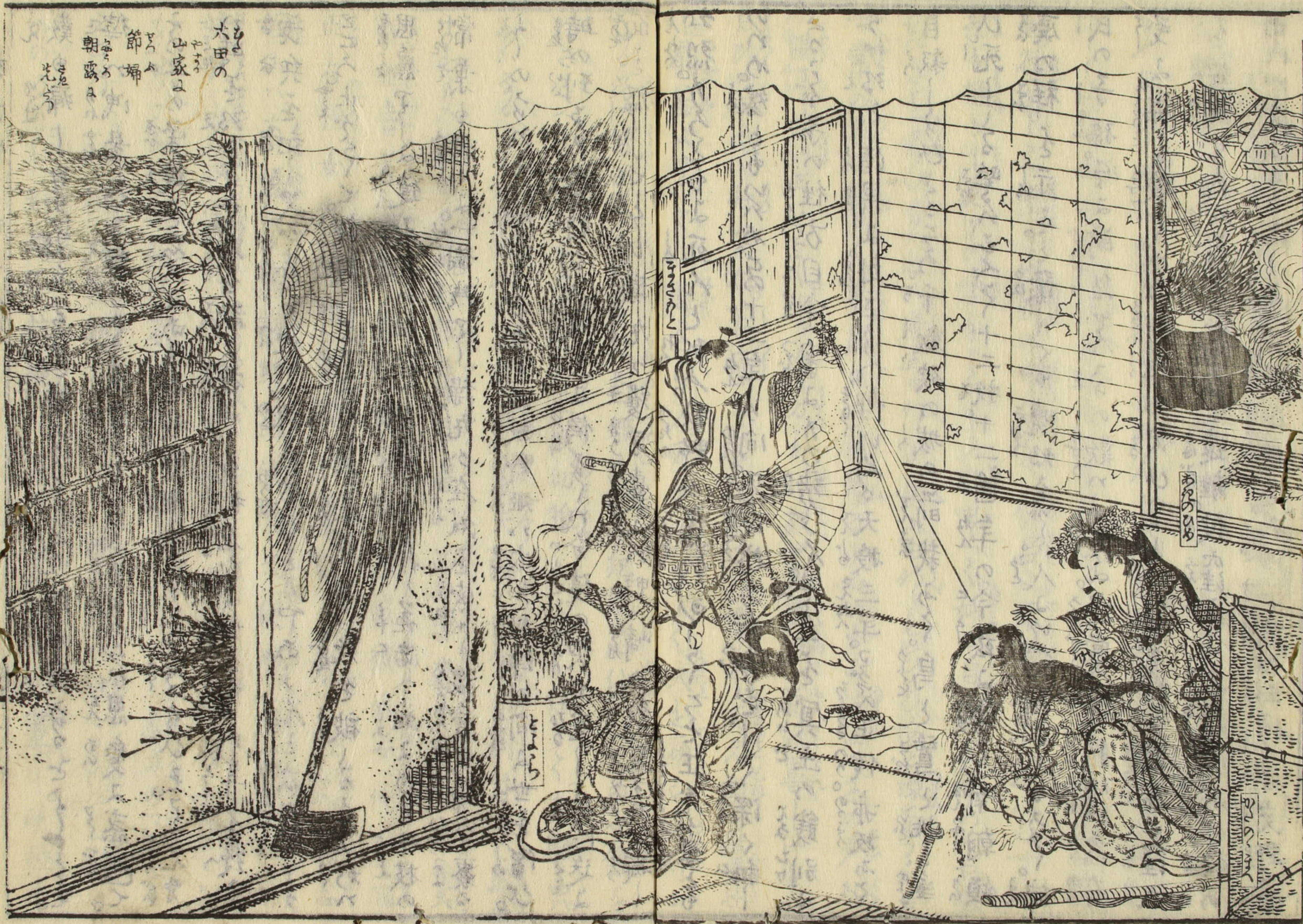
あはれ

ゆきの前

とら



あつんと忙しく。後の裏は玉の緒の魂銷又も名ふ所似ぬ。獲刃刀
を抜せむ。豊浦ハ吐嗟と携帶憂憂通うく作らるやぞ乱れ
多々軟苧環のうへに死んといひと理ありて侍りける。結髪
すくする殿さふん往方こそよまね世より人ともゆえぬりの
を存命く坐さん。孰の令なりと彼君又環會んといふほど中ん
花も標も十久その含をしんぐ散せと姑の自害ふらんや堪
かたきを忍びおめねば孝も依ど。負もゆるいひきはと疎てもそれ由
常の名は響く。豊浦の寺の鐘なるべし。そよは涙よこしの声外
へ漏さず聲きこえて。サウサ刀を引放せ。交野前の喜一げ。
点改のとみ物いけぬ。苦痛さをとおかりひかり正元顔嘆息
扇笏まさろ小膝をため。死を潔くして夫を励まし交野が
公烈。ろろも死んと死ぬ。秋野が孝那。おくろろを正元夫妻も
いのめ。嫁ともいのめ。あ十二年の間兄正勝おも告ごう深く秘し
この子の往方目今審まりの誇り。そよを眞土の銭別よ
うけり清果な赴き入り抑いの天授三年。ちへ正代赤坂み
自殺しひころろ千釵破の城の前裁あく。烏と鷺と挑ませ
ひ死する驚いと十二枚十二箇年の今茲又當く南朝傾
廢の祥を示すと豫しも曉るごと人はいづれいもスグ捕
氏の子孫。そ断絶見るの歎へると老黨津積窪六右
義と謀を授くる。操丸を失ひつるといへせ。それを執度窪六
を追放じ人あらむ必ず子を遠離。彼窪六は久後を托するの
あれはもう。そよあざれば兄正勝は和田武の公はく。交野悲



大田の
山家
節婦
朝露
光

歎中痛しけしど。兵々筑道うろとく。謀ハ密うるとし。これ
緯ハ洩易れを憚りく。ふすむハいんさうと。これ恩愛又惑溺て。
その子の栄達を思ふとあつど。秋野姫もあくる夢みひそ。ふか兄才
ハ時を忍びく。えを敵と授るとも。操九も又世とあつど。年を経く
戎兵を起し。又か志を續ぐ。仇を滅ぶと力やあつん。とふ孝ふと
ところ止ぐて。親族と子又の年暮り。その歎を被るる。初ハ
思慮又違ふ。兄ハ紀路へ没落し。これハ花洛へ死よゆく。千枝の
常葉も枯く。一樹残る。操九ハ在ぬを索く。環會夫婦全聚る
うのうれやもあつど。あつど。秋野姫ハ大和根津の間又世を潜び。
時の到る。又等待く。産屋は偽る。ハ分産の契も空しく。送よ
面を隠く。ととも。操九ハ獲牙囊あハ。野崎の親世主と擬し。
うる。像あり。今又秋野姫あ。志紀の毘沙門天の小像を
見るさ。と。祖又正成。幼稚より。ふく信く。愈驗ふ。
あつる。うの。世の人の。あつる。夫婦再會の割符あ。これ
あつる。の。あつる。法華経普門品の要文。ハ。礼拝供養
觀世音菩薩。便生福德智慧男。設欲求女。使生端
正。有相女。宿植德本。衆人愛敬。と。親の。又賢愚
經ハ。有優婆夷誦經。毘沙門天從空而遇。乃曰。姉
妹我。与汝宝物。可請舍利弗。奔。當得勝福。と。親
の。智の。及。あつる。人の。才を。借。人。力の。及。あつる
と。あつる。神佛の。冥助を。仰。豊浦ハ。雄。と。あつる。操の
の。の。秋野姫を。扶掖。主。の。を。窶。法隆寺

のめくろ。活ふ。彼寺ハ。楠氏ハ舊好あり。密ニ住持リ。悪
逆ス。ふ。ふ。の隠家ともなりぬ。と。逆の峯入
セ。山伏ハ打扮。直リ華洛へありぬ。さ。さ。さ。
や。と。色。彼。又。現示。一。頂。又。被。さ。る。獲。身。囊。を。さ。り。外。
秋野。姫。より。授。け。や。軍。要。又。貯。録。され。金。二。包。と
り。出。る。さ。さ。を。豊。浦。又。通。より。秋。野。姫。主。後。ハ。は。
め。く。縁。由。を。さ。さ。り。あり。め。さ。れ。や。い。ふ。未。く。世。ハ。憑。り。た。か。お。か。
命。ハ。撞。死。の。夕。を。ま。さ。ぬ。姑。母。前。せ。え。る。存。命。あり。う。が。名。告。
あ。い。ふ。ふ。が。も。あ。い。ん。今。と。さ。り。い。い。ふ。る。向。本。意。る。別。り。
い。ふ。る。う。け。け。う。ろ。実。は。り。ち。う。へ。と。呼。活。ら。ま。さ。く。交。野。前。ハ。
や。う。や。う。眼。を。開。け。緯。の。や。う。ハ。さ。さ。さ。ぬ。今。般。は。さ。さ。さ。る。子
の。存。亡。その。物。終。々。千。僧。の。流。経。は。ま。さ。く。罪。つ。れ。迷。ひ。の。雲。を。吹。
く。く。く。の。さ。さ。へ。帰。り。花。吉。野。と。い。は。紙。雛。の。夫。婦。が。手。う。り。
未。期。の。水。と。り。受。ぬ。る。の。遺。憾。と。い。ふ。も。羊。の。唇。を。動。と。い。ふ。さ。
緯。断。と。う。覚。け。の。ま。て。も。堪。え。ぬ。声。は。は。嫁。眼。は。泣。男。の。あ。い。ど。が
め。く。便。う。り。と。励。を。乳。母。の。袖。ま。ぎ。と。千。釵。破。を。さ。く。神。々。月。六。
田。の。山。川。水。落。く。石。又。名。を。書。亡。魂。を。導。け。り。人。救。世。圓。通。
煩。惱。菩。提。種。々。門。天。教。の。宝。も。眼。前。男。の。情。を。お。り。載。く。
路。費。又。物。ハ。缺。け。も。世。を。溺。ぶ。旅。と。死。出。の。旅。道。一。人。と。
首。途。ハ。経。帷。子。又。禪。衣。又。髪。と。兜。巾。の。假。山。伏。女。道。者。の
り。う。回。向。旅。の。さ。う。も。ハ。孫。被。の。條。あ。い。ぬ。亡。體。を。さ。さ。り

隠々々々。芒花か末の野葬。長き夜を。そり〜

松澤情史秋七草卷之二

ウエブスル氏 スヘルリグ 獨學 一冊 日本 書記 神代卷 千段多付	サレセント氏 第リートル 獨學 一冊 加藤高文氏 地方大概集 目録編至四 編各三冊完	宮田先生著 皇朝戦畧編 八冊 合本 近藤先生著 金銀圖録 杉色へ 全七冊	学校専用改点 小學素讀本 二冊 英學之部 横文字獨舊占 全一冊 森先生著 洋算学 五冊 石西洋美術甲 新装紙の七巻の二冊	森先生著 洋算学 五冊 石西洋美術甲 新装紙の七巻の二冊	大阪心齋橋 前川源七郎梓
--	---	---	--	--	-----------------

